

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

——天岩戸を中心に——

黄 當 時

〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称やそれに由来する地名には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

小論では、「天岩戸」は「天+岩+戸」の構造であること、ポリネシア語の「ama-iwa-tau」に相当すること、「天 ama アウトリガー+岩 iwa 鳥+戸 tau 船」の意味構造であること、全称は「鳥を舶載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、姉妹船に「天鳥船、天鴿船、天磐船」があること、などを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、中国語やポリネシア語等の外国語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 船舶、手/田/多/戸、諸手船/室戸(岬)、天鳥船/天鴿船/天磐船、天岩戸

1. はじめに

『古事記』『日本書紀』に、天照大神が隠れたことで世界が真っ暗になった天の岩戸隠れの説話があり、当該箇所は、次のように現代語訳されている¹⁰¹⁾。

それで天照大御神は見て恐れ、天の石屋の戸を開き、なかにおこもりになられた。すると高天原はすっかり暗くなり、葦原中国も全く暗くなった。こうして夜がずっと続いた。……そこで、天照大御神は不思議に思い、天の石屋の戸を細目に開けて、……天照大御神

はいよいよ不思議に思っ、少しづつ戸から出で……こうして天照大御神がお出ましになった時、高天原も葦原中国も自然と照り明るくなった。（『古事記』上巻。pp. 63-67）¹⁰²⁾

このことによつて、天照大神は立腹し、天石窟に入れ、磐戸を閉じて籠ってしまわれた。それで国中がいつも闇ばかりとなり、昼夜の交代の別も分からなくなった。……御手で細目に磐戸を開けて外をうかがわれた。その時、手力雄神はすぐ天照大神の御手をお取りし、引いてお出し申しあげた。（『日本書紀』巻第一 神代上〔第七段〕正文。pp. 76-78）

いづれの訳者も、天石窟や磐戸に説明を加えないが、恐らく、字面の通り（漢字の表意機能が利用されて）天の石窟や磐の戸という意味に理解しているのであらう。

この説話は、天に石窟がありその石窟を出入りした、という理解でよいのであらうか。とんでもない大きな誤解である可能性はないのであらうか。

磐の戸を開けたり閉めたり、さらには磐の戸を細目に開けたり、などと理解しているようだが、それでよいのであらうか。とんでもない大きな誤解である可能性はないのであらうか。

天球に何か構造物が見えたとしても、それが石でできているのか、土でできているのか、ははっきりしなかつたであらうし、情報をもたらした語部(集団)は、そのような意味（岩石でできた石窟という意味）でこの情報を代々口伝したわけではなからう。

実際に庭の石でも少し動かしてみればすぐわかることであるが、人間が這ってやっを入れるような穴を塞ぐ石ですら、動かせるものではない。まして、立ったまま自由に出入りできるような空間（出入口）を塞ぐ（閉じる）ことができる大きさの磐の戸は、実際に試みていないので申し訳ないが、きっとピクリとも動かないことであらう。そこに、細目に開ける、という情報が加わるなら、磐戸は磐の戸であり岩石の戸である、などと考へてはいけなことは、研究分野が文系であっても、学者・研究者自身で気付かねばならぬし、気付くのが難しい場合でも、どうもおかしい、くらいの不審を抱きたいものである。

科捜研のドラマを茶の間で見る今日、私たちも、そろそろ解析手法を根本的に見直さねばならないのではないであらうか。

『日本国語大辞典』は、天の岩戸を次のように説明している（第二版第一巻 p. 541）。

あまの岩戸（いわと）

- ①高天原にあつたとされる岩窟の堅固な戸。高天原の入口にあると信じられていた。天の岩門。天の岩屋戸。天の戸。あめのいわと。
- ②伊勢神宮の外宮の南方、高倉山の上にある大きな岩穴。
- ③女陰の異称。また、それを見せる見世物。

『日本国語大辞典』は、恐らく、岩石の戸は動かせない、ことに気付いたためであろう、(高天原にあったとされる)岩窟の堅固な戸、と説明するが、建材が岩石ではないことに気付いた点は、高く評価できる。また、磐、の正確な意味が取れず、さりとして、これほど重要な語句を説明しない訳にもいかないのが、堅固な、と説明したのであるが、原文には岩とあるだけで、堅固であるともないとも書かれていない。余計な説明であった可能性はないのであろうか。また、高天原にあったとされる、と説明するが、原文には天とあるだけで、高天原とは書かれていない。こちらも余計な説明であった可能性はないのであろうか。

説話の舞台である天岩戸(あまのいわと)は、天戸(あまと)、天岩屋(あまのいわや)、天岩屋戸(あまのいわやと)ともいい、「岩」は「磐」あるいは「石」と書かれる場合もあるが、小論では、便宜上、天岩戸、の一語形で解析を加えていきたい。

由来は、はっきりしないが、天岩戸という言葉にはどのような情報が含まれているのであろうか。

私たちは、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある。海の経験の乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点に少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点から天岩戸の名称の由来を探っていきたい。

2. 先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見べきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたのが、その当て字として「枯野」(『古事記)、「枯野、軽野」(『日本書紀)が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであつ

た。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、

「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、**「大きな・帆をもつ・カヌー」**

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、**「大きな・双胴のカヌー」**の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、**「大きな・カヌー」**の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

3. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので³⁰¹⁾、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰(四三三六)、伊豆手乃船(四四六〇)と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船(巻十二、三一七二)、真熊野之船(巻六、九四四)、真熊野之小船(巻六、一〇三三)、安之我良乎夫禰(巻十四、三三六七)などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、(四三三六)の「伊豆手夫禰」³⁰²⁾と(四四六〇)の「伊豆手乃舟」³⁰³⁾である。

異文化の語彙(外来語)を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「カ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない(例：扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール；信用卡、クレジットカード)。ところが、「啤」や「カ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「異文化の語彙(外来語)+類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語にも見られる。このケースでは、「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫禰」や「舟」という類名を加えて、「手夫禰」や「手乃

舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、(四四六〇)では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約により一文字少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、(四三三六)で略称の「手」で詠まれた船は(四四六〇)では、音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、歌人が音節数の制約から用いた略称の「手」は、全称の「手乃」の前置要素「手」が略されて後置要素「乃」が残ったものではなく、後置要素「乃」が略されて前置要素「手」が残ったものである。意味が取れるかどうかにかかわらず、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは、見て取れる³⁰⁴⁾。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手^て」としているが、「手^て」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り敢えず一つ当てただけのことではないのだろうか。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか。

次は、(三一七二)の「熊野舟」³⁰⁵⁾、(〇九四四)の「真熊野之船」³⁰⁶⁾、(一〇三三)の「真熊野之小船」³⁰⁷⁾である。

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプのもを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の「安之我良乎夫祢」³⁰⁸⁾である。

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙（外来語）＋類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎」と書き記した、と考えるのみでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、やおみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあ

るのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

後人は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船」や「乎夫祢」の正確な意味がわからず³⁰⁹⁾、「小/乎」を接頭語か形容詞と誤解して「を」と訓んだが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね/こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」か「こ」を書き記した（「を」か「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語の船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。研究者は、今後、「こぶね/こぶね」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字と分類されるように、表意機能が強いため、漢字を理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解けた気分になれば、思考がそこで停止する。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが間々生じるのである。

「小」や「乎」は、表音に用いられたのであり、表義に用いられたのではない、と考えてよい。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまっても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の念を喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したものということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は、「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃 (tau-nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように (p.142)、(四三三六)の「手 (tau)」は (四四六〇)の「手乃 (tau-nui)」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手 (tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎 (kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手 (tau)」が使われ、熊野や足柄では「小/乎 (kau)」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手 (tau)」と呼ぶ人々が、そし

て、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎 (kau)」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

漢字しか知らない者は、漢字しか書けない。tau(舟/船)という音声情報を、伊豆の知識人(たち)は漢字で、手、と書き記した、と見てよからう。

これで、古代の日本の船舶には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野; kau-nui、狩野³¹⁰; tau-nui、手乃³¹¹) と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手; kau、小/乎) があったことがわかる。

4. 手と書き記された舟/船

『広辞苑』(第五版 p. 1838) や『日本国語大辞典』(第二版第九巻 p. 706) に手船があり、それぞれ次のように説明している。

て-ぶね【手船】

- ①自分の所有する船。持船。
- ②船頭をたのみず、自分で舟を漕ぎながら釣りをすること。
- ③網漁業を指揮する者をのせる船。

て-ぶね【手船】【名】幕府・諸大名をはじめ廻船問屋や商人などが所有する船。彼らが適宜にやとう雇船に対していう。

方言①荷物を運ぶのに用いる大きな平たい船。和歌山市。

- ②網を見張ったり漁獲物を運んだりする本船付属の小舟。愛知県知多郡。
- ③小舟。香川県伊吹島。
- ④鱒(さわら)流し網で、親方の乗っている船。香川県男木島・伊吹島。
- ⑤(「手で作る船」の意)子供を抱くこと。また、二人が手を組んで人を乗せること。群馬県多野郡。

形状や大小に関しては、説明の一部に、平たい、小さい、とある程度で、詳しい説明がない。先に(3. 『万葉集』の船)、伊豆手夫^手夫^船、伊豆手乃^手船^船があることを見たが、『日本書紀』(巻第二、神代下)には、「熊野の諸手船」という船がある。

『日本国語大辞典』は、諸手船を、「(「もろた」は諸手または両手の意) ①多くの櫓のついた早船、または二挺櫓の早船。②島根県八束郡にある美保神社の諸手船神事に用いるくり舟」と説明し、また、諸手船神事の項で、「船員船子らが樟(くすのき)をえぐったくり舟に乗り、

海岸で神官が擬装した事代主神に拍手をし櫂(かい)で六回港内をこぎ競う」と説明している(第二版第十二巻 p. 1413)。

茂在寅男氏は、「諸手」の字を「モロタ」と読ませているが「モ・ロト」の当て字ではないか、と考えた。ポリネシア語では、「ロト」は「内海」であり、「モ」は「……に使うためのもの。何々用の」であるから、「モ・ロト」は「中海用の」という意味になる、というわけである。個々の単語の意味は、そうではあるが(mō for; for the use of と roto lake; swamp)⁴⁰¹、茂在氏は、「ロト」という単語に拘泥するあまり、直感的にも、「モロ・タ」で意味を切り分ければよいところを「モ・ロト」と切り分けてしまったのである⁴⁰²。

茂在氏は、諸手船に関する最も信頼できる情報として、その著書に美保神社社務所発行紙『美保』(昭和54年9月20日版)の「素朴ななかに精緻な技法・刳舟の倣保つ諸手船」を引用しているので、ここに再録し、目を通しておきたい⁴⁰³。

船体は、大きな樅材の中を刳った二本のオモキ(主材)を、胴部がふくらんだ凹円形になるように漆で接合し、船釘で止めてある。さらに船首にツライタ、船尾にトコイタを張り、両舷側を二本の太い船梁で支え、がんじょうな構造をなしている。

諸手船は、本来樅材くすの単材式刳船であったと伝えているが、用材が不足し、二本のオモキを接合する方法、オモキとオモキの間に補助材(チョウ)を入れる造船法となり、用材も樅から樅くすに変わってきた。

しかし、……。

現在の諸手船が古型の刳船のおもかげをよく保持し、耐波性・高速性および乾湿に耐えることに工夫されていると認められるのは、たとえ古風に見えても、優れた技法によるものと注目しなければならない。

諸手船の……。

諸手船の名称については諸説あって、目下のところ、「諸人の手によって漕がれる船」の意で、原始的な刳舟から、あるていど進んだ構造船とする見方が有力である。文献上の諸手船の最古の例は、日本書紀の国譲りの条にみえる、熊野諸手船である。

オモキとは、「主木」のことで、「丸木船」の一種である。一本の丸木でこれだけの用材を求めるのは困難であるため、二本の丸木を準備し、一本で船を縦割りにした半分だけを刳り抜いて作り、もう一本で対称の形のオモキを作り、この二本のオモキを接合して、船底を含む船体の大部分を形作り、これに、船首にはツラ板、船尾にはトモ板を付け、さらに船バリ、船ブチの取付けをして形を作り上げる。船の寸法は、約6メートルが標準である⁴⁰⁴。

茂在氏は、船舶に対する深い造詣に助けられて、「諸手船」は「中海用の船」である、と一見無難に結論づけたが、それを導き出した言語学的考察が間違っていることは、指摘しておく

たい。

「諸手船」の「手」は、上述の通り、手 (tau) という名の船であり、「船」は理解を助けるための類名である。そして、「諸」とは、「しっかりと結びつける」の意味である (molo. vt. to tie securely)⁴⁶⁵。全体で、オモキを嚴重に連結してできた手 (tau) という船、の意であることは、おわかりであろう。

先に (3. 『万葉集』の船)、漢字しか知らない者は、漢字しか書けない。tau(舟/船)という音声情報を、伊豆の知識人(たち)は漢字で、手、と書き記した、と見てよかろう、と書いたが、tau(舟/船)という音声情報を、島根の知識人(たち)も漢字で、手、と書き記した、と見てよかろう。

先に、外来語を取り入れる場合、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられれば、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。このケースでは、「諸手」と訳して、一応、事足りているが、一般の者にはややわかりにくいかもしれないので、よりわかりやすくするために、「船」という類名を加えて「諸手船」とすることにより、「諸手」という言葉がわからない者でも、船のことらしい、くらいはわかるようにしているのである。

諸手船について、その語構成を詳細に見てきたついでに、下記の、室田、室谷、室津、室戸、等も見ておきたい。

室田 (むろた) は、恐らく、molo-tau、を書き記したもので、上述の島根の知識人(たち)が、諸手、と書き記したのと同じ船であろう。表記の揺れは、時代差や地域差さらには個人差・団体差による音声情報の差異を反映しているのであろう。

室谷 (むろたに) は、恐らく、molo-tau-nui を書き記したものであろう。tau-nui は、大型の tau である。この二語は、辞書に、姓氏の一つ、と説明があるが、(農林業や漁業ではなく) 双胴船や大型双胴船の製造や運行・管理等に携わったことに由来していると考えてよいのではないか。

室津 (むろつ) は、恐らく、molo-津を書き記したものであろう。molo-tau 津、の省略形であるが、家屋や部屋が (沢山あることが) 特徴的な津、に由来するのではなく、双胴船が (沢山あることが) 特徴的な津、に由来するのであろう。

室戸 (むろと) は、恐らく、molo-tau、を書き記したものであり、島根の知識人(たち)が、諸手、と書き記したのと同じ船であろう。また、室田と同じく、表記の揺れは、時代差や地域差さらには個人差・団体差による音声情報の差異を反映しているのであろう。室戸岬は、行けば、建物の扉や障子・襖がぶかぶか浮いているのが見えるのではなく、行けば、室戸 (molo-tau、双胴船。類名を付ければ、室戸船、島根地方の表記を使えば、諸手船) が行き交うのが見える岬であることは言うまでもない。

5. 田と書き記された舟/船

『広辞苑』(第五版 p. 1670) や『日本国語大辞典』(第二版第八巻 p. 1083) に田舟があり、それぞれ次のように説明している。

た-ぶね【田舟】

深田で、苗・刈穂や肥料を運ぶ舟。苗舟。

た-ぶね【田舟】〔名〕

- ①彌生時代から使われている水田用の小舟。苗や刈り取った稲、肥料などを積んで、水田上を押し運ぶもの。
- ②沼や水郷などで、農作物の運搬や日常のゆききなどに用いる舟。一枚棚の簡素な箱造りを用いるものが多い。

『広辞苑』、『日本国語大辞典』(②の説明を除く)ともに、水田で用いる舟/船と説明するが、文字表記にとらわれて、水田以外の場で用いる田舟/田船が存在した可能性を無意識に排除していることはないのでしょうか。この説明では、田舟/田船は稲作が行なわれるようになった後にできた舟/船ということになるが、田舟/田船が稲作が行なわれる以前から存在した可能性はないのでしょうか。田舟/田船は、至る所で用いられ、偶々、田、という文字で書き記されたために、水田で用いる舟/船、と誤解された可能性はないのでしょうか。

古代日本語の文字記録(『記』『紀』)には、田舟/田船そのものはないようであるが、地名の堅田は、船舶の名称に由来している可能性があるように思われる。田という舟/船が早くから存在し、田という舟/船を応用して造られた舟/船である可能性を示しているのではないか。

『日本国語大辞典』(第二版、第三巻、p. 717)には、次のような説明がある。

かたた-ぶね【堅田船】〔名〕

近江国堅田(滋賀県大津市)に通う、琵琶湖を通行する船。堅田通いの船。

一見無難な説明だが、これでは、例えば、阪九フェリーを、大阪と九州を結ぶフェリー、としか説明しないようなものである。せめて、主力船は何トンで、平均時速何ノット、大阪と九州を何時間で結ぶ、くらいの説明がほしいところである⁵⁰¹⁾。

また、大阪と九州とを結ぶフェリーには、阪九フェリーもあれば、阪九フェリーではないものもあるように、堅田に通う船がすべて堅田船というわけでもなからう。

このような説明は、図らずも、このようなことしかわからないことを示しているが、堅田と

という言葉には、何の情報も含まれていないのであろうか。

先に、外来語を取り入れる場合、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられれば、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。このケースでは、「堅田」と訳して、一応、事足りているが、一般の者にはややわかりにくいかもしれないので、よりわかりやすくするために、「船」という類名を加えて「堅田船」とすることにより、「堅田」という言葉がわからない人でも、船のことらしい、くらいはわかるようにしたのである。

元々、「堅田」という言い方で事足りていたものの、意味がわかりにくくなったために「船」という類名を加えて「堅田船」としたのであるが、時がさらに流れると、船の字があるから船だ、堅田と書いてあるから堅田に通う船だ、というくらいのことしかわからなくなってしまったのである。

茂在氏が言うように、「堅」は、^{カタ}タミル語で、「結ぶ」を意味するが、古代日本人は、他の言語の要素とも組み合わせ使用できるほどに、「堅」の^{カタ}意味・用法をマスターしていたと考えられる。

「堅田」の「堅」は、『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）の「無目堅間」の「堅」^{カタ}と同じ文字表記を用いており、意味・用法も全く同じである。もうおわかりであろうが、「堅田」^{カタタ}とは、「連結されたタ（tau、田）、双胴のカヌー」、の意であり、『日本書紀』の「堅間」同様、やはり、カタマラン/双胴船である。

堅田は、カタタ（連結されたタ（tau、田）、双胴のカヌー）がよく利用し、カタタがよく見られたところであることからできた地名である、と考えてよい。いつも堅田という船があり、いつも堅田という船が見えるところ、それが堅田である⁵⁰²。

今日、私たちがカタマランという船は、古代の日本語の中では、カタマと呼ばれたりカタタと呼ばれたりしていた、と考えてよからう。この単語は、古代日本人の言語的な運用能力の高さを如実に示している。

なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入ってきていた、と考えている（茂在寅男1984。p. 44）。

先に（4．手と書き記された舟/船）、漢字しか知らない者は、漢字しか書けない。tau(舟/船)という音声情報を、伊豆の知識人(たち)は漢字で、手、と書き記し、島根の知識人(たち)も、同様に、漢字で、手、と書き記した、と見てよからう、と書いたが、近江の知識人(たち)は漢字で、田、と書き記した、と見てよからう。

6. 多と書き記された舟/船

古代日本語の文字記録(『記』『紀』)には、多という舟/船そのものはないようであるが、地名の博多は、船舶と何らかの関連があるように見える。博多という地名は、多という舟/船との

何らかの繋がりに由来するのではないだろうか。

博多は、『広辞苑』(第五版、p. 2121)、『角川日本地名大辞典』(40福岡県、p. 1061)に、それぞれ次のように説明されている。

はかた【博多】

- ①福岡市東半部の地名。博多湾に面した港町・商業都市として発展。西隣の城下町福岡とともに、現在の福岡市の中心部を形成。古く屯倉みやけが置かれ、また朝鮮半島との交通の要衝として開けた。古名、那大津なのおおつ・那津ながつ・なのつ。
- ②博多織の略。

はかた 博多〈博多区〉

博田・博太・博多田とも書く。また、石府城・冷泉津・鳥津などの異称をもつ。中国の史書では覇家台・花旭塔・八角島なども表記される。那珂川河口右岸に位置し、北は博多湾に面する。広義には博多湾の沿岸部一帯をさすが、狭義には、東は石堂川、西是那珂川、南は房州堀、北は博多湾で囲まれた領域をいう。地名の由来については、人や物産が多く集まり、土地が広博であるとの解釈から来た説、鳥が羽をのぼしたような地形であるところから「羽形」と称されたとする説や、元来は「筥多」であり、「筥」とは周囲を河海で囲まれた島状の地形をいうところから来たとする説、船舶が停泊する潟に由来する説などがある。

「多」は、恐らく、「^た多」であろう。tau(舟/船)という音声情報(意味も含む)をこの地方の知識人が漢字で書き記したものである、と見てよかろう。そして、博は、haka. 1. n. shelf, perch, platform;⁶⁰¹⁾という音声情報(意味も含む)を書き記したのではないだろうか。shelf, perch, platform は、それぞれ、砂州・浅瀬、止まり木、プラットホーム・歩廊、の意で、tau(舟/船)と組み合わせれば、舟/船の砂州・浅瀬、舟/船の止まり木、舟/船のプラットホーム・歩廊、となるが、風待ち/潮待ちをする舟/船も利用する遠浅の港、に由来する地名であろう。

先に(5. 田と書き記された舟/船)、漢字しか知らない者は、漢字しか書けない。tau(舟/船)という音声情報は、伊豆や島根では漢字で、手、と書き記され、近江では漢字で、田、と書き記された、と見てよかろう、と書いたが、九州では漢字で、多、と書き記された、と見てよかろう。

外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。

日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポートの揺れがある。関西でヘレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストランでは、フィレとも言っている。

問題の性質がやや異なるが、最近の例では、金正日氏の三男の漢字表記の問題が挙げられる。金正恩氏は、当初、「金正雲」と表記されていたが、「雲」はハングル表記の読音と対応しないことがわかり、「銀」か「恩」であろうとされた。中国語では、一時（2009年12月）、「金正恩」に変更し、その後は、「金正銀」と表記していた。この間、日本語では、漢字表記ではなく、「キム・ジョンウン」とカタカナ表記をしていたが、今は、漢字表記に戻している。なお、金正日氏も、一時期、金正一と表記されたことがあった。

瀬戸内海に伯方島があり、『角川地名大辞典』（pp. 520-521）に次のような説明が見える。

はかたじま 伯方島〈伯方町〉

瀬戸内海の中央部、今治市と広島県尾道市の中間にある島。越智郡島嶼部の政治・文化の中心の島で、行政的には1島1町の伯方町である。面積19.27km²、周囲は多くの岬があって長さ32.5km、木浦・有津・熊口などの良湾を作っている。……島の歴史は古く、叶浦・瀬山・道下・熊口などの縄文遺跡や、宝股山の弥生時代の高地遺跡がある。……豊臣秀吉の四国征伐後は諸城も破壊され、帰農した武士を中心に開発が進められて、本浦・有津・伊方・叶浦・北浦の5か村が成立、今治藩領となった。近世の伯方は、木浦港を中心に風待ち・潮待ちの中継港として知られ、海運業も盛んであったが、……。

そして、伯方町について、次のように説明している（p. 521）。

はかたちょう 伯方町〈伯方町〉

瀬戸内海の伯方島の南部に位置する。地名は、喜多浦八幡神社の博多宮崎八幡勧請の博多（伯方）説、河内伯方者の来住説などの語源説がある。

幾つかの語源説があるようだが、瀬戸内の伯方は、九州の博多と同じく、舟/船の砂州・浅瀬、舟/船の止まり木、舟/船のプラットホーム・歩廊、を意味し、風待ち/潮待ちをする舟/船も利用する遠浅の港、に由来する地名であろう。

「博多」は「^{ハカ}博+^タ多」（haka、砂州・浅瀬、プラットホーム・歩廊）+（tau、舟/船）であり、「博多」は「^タ多」という船が利用する遠浅の港に由来する地名であろう。また、「伯方」も同様に考えてよいであろう。

7. 天鳥船、天鴿船、天磬船

『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に、「天磬船」が登場するが、同じ構造で言及される船が他に二船あり、考察の便宜上、天鳥船、天鴿船とともに取り上げたい。

『日本書紀』(神代下、第九段、一書第二)に「またお前が往来して海で遊ぶ備えのために、高橋・浮橋と天鳥船も造ろう」⁷⁰¹⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天鳥船」に「ここでは水鳥の船。鳥は他界(海は他界)と往来すると考えられていた」と頭注を付している(p. 135)⁷⁰²⁾。

この頭注は、「天」を解釈することなく、「天鳥」の二字で「水鳥」と解釈しているようである。「海は他界」というのは、陸の民の発想であり、海の民のそれではない。そのような視点からでは(その程度の知識しかないようでは)、恐らく、正確な理解につながる解釈はできないのではないだろうか。

次に、『日本書紀』(神代下、第九段、正文)に「そこで、熊野の諸手船に〔または天鴿船という〕、使者の稲背脛を乗せて遣わし、高皇産霊の勅を事代主神に伝達し、またその返事を尋ねさせた」⁷⁰³⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天鴿船」に「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鴿」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」と頭注を付している(p. 117)。

鴿は、鳥類の中でもさして速く飛ばないため、飛行速度が速いという比喩に用いるのには、適当ではなかろう。海の民は、実際には、私たちにわからない何か重要な理由で鴿を用いていた可能性があるのではないだろうか。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994に限らないが、鳥類についての知識が、恐らく、あまりないままに、字面に基づいて何かしら書いておこう、という程度の発想で解釈を施したのではないだろうか。この点については、『日本国語大辞典』の編者も同じことであろう⁷⁰⁴⁾。

さらに、『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に「すると、『東方に美しい国があります。四方を青山が囲んでいます。その中に、天磬船に乗って飛び降った者がおります』と言った」⁷⁰⁵⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天磬船」に「天上界の磬のように堅固な船」と頭注を付している(p. 194)⁷⁰⁶⁾。

「天」を「天上界」と解釈しているが、この解釈で正しいのであろうか。磬船は、磬(の)船という意味であって、磬(の)ように堅固な船という意味ではないのではないだろうか。また、(不思議なことだが、鉄で造られた船は水に浮かんでも)岩石で造られた船が水に浮かぶことはないので、岩石を船の堅固さの比喩に用いるのは、第二例の、鴿が速く飛ぶ、以上の不自然さを覚えざるをえないが、如何であろうか。

以上のように、「天鳥船」、「天鶴船」、「天磐船」の「天」は、他界、天上(界)と解釈されている。天上(界)は、体積が相当大きい物体でなければ、地上からはその動きが視認できない空間であり、他界は、行けば同じ肉体では帰って来られないはずの空間である。これは、鳥も例外ではない。解釈者は、解釈対象が一体どういうものなのかが今一つよくわかっていないのではないだろうか。字面だけを頼りに単なる憶測で解釈をしているということはないのであろうか。「天」には、他界や天上(界)以外に、この三船に共通するような意味はないのであろうか。

また、鳥を水鳥と解釈したのは、単に、船が直後にあるからで、具体的な水鳥を想定しているわけではなからうが、如何であろうか。磐は、やや異質なものに見えるものの、鳥や鶴に共通する何らかの意味を持っている可能性もありそうだが、そのような磐はないのであろうか。

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げているが、天については、次のように述べている⁷⁰⁷⁾。

……アマというのは、天、海の両方の意味にとれる、冠語的な形容詞であるといわれてきた。そして『日本書紀』の文脈のなかでは、それもいちおうはうなずける解釈であった。しかしこの場合、「天」という漢字からいったんひきはなして、AMAの発音だけで考えると、つぎのようなポリネシア語の意味が浮かびあがる。

アマ=カヌーのアウトリガーという腕木の先についている浮木。すなわちカヌーのアウトリガーについている縦方向の木。

AMA = Outrigger float; the longitudinal stick of the outrigger of a canoe. ⁷⁰⁸⁾

アウトリガーのフロートというのは、カヌーの転覆をふせぐためにつけられた、かんたんな装置である。カヌー本体の横から何本かの細い腕木を出して、その先に、船型の浮木をつける。浮木の長さは、長いもので本体の八割にまで及ぶこともある。

なお「記紀」に「冠詞」として数多く出てくる天という言葉や、なぜこの場合だけアウトリガーと解するのか、という疑問も出るはずである。しかしカエルという言葉がゲコゲコ鳴く動物だけでなく、帰る、変える、の意味を持つこともある。どこの国の言葉にも、いくつか複数の意味をもつ同表音の単語、多義語が多数存在している。

この事情は現代も古代も、さほど変わりがないであろう。さらにアマノイワフネの場合、とくに海または船に強く結びつく点で、AMA=アウトリガーの浮木説を採用しても無理ではないと思うのだが、いかがだろうか。

天^{アマ}については、茂在氏の推論が成立すると考えてよい。

漢字は、表意機能が極めて強いため、漢字を理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、残念ながら、容易ではない。解析結果に不審の念を抱いても、漢字の意味から考えてこの解釈でいけるはずだ、と一旦思い込んでしまうと、不審の念はいつしか消え失せてしまい、新たな切り口を見つけ、より正確な解析結果に辿り着くチャンスを失ってしまうのである。未知、或いはほとんど未知、の情報を解析する場合、普段使用しないような装備（知識）も、念のために、ある程度準備しておいた方がよい。

このケースでも、私たちは、つい、漢字が意味を表記しているように考えてしまいがちであるが、この天^{アマ}は、例えば、天井や天汁^{テン}の天や丸芳露^{マル}⁷⁰⁹⁾の丸と同じく外来語の音声を表記したものであり、天^{あま}（天空、sky）の意味はない。

次は、鳥、鴿、磐、である。この三者は同じような情報を伝えている可能性があるのではないか、という見当位は誰もつけられるであろう。

ここでは、鳥や鴿は、漢字の表意機能が利用されており、字面の通り、鳥や鴿^{とり}^{はと}⁷¹⁰⁾と取ってよい。天磐船では、鳥という情報を伝えているはずの漢字「磐」は、字形に意味がなく字音に意味があるため、理解するには、先の天^{アマ}同様、言語の知識、特に異文化の語彙（外来語）の知識がある程度必要である。磐^{いわ}の船が水に浮かぶことはないことから、意味表記ではないことがわかるが、茂在氏は、磐について、次のように述べている⁷¹¹⁾。

しかし「イワ船」のイワを、文字どおり「岩・石・磐」の意に解釈するには、疑問が最後まで残る。岩の船は水に浮かばないからである。これらの言葉は「いい伝えられた言葉」を、単に文字に表現して記録したもの、つまり「当て字」と考えるべきなのではないだろうか。

したがって問題は、アマノイワフネという表音である。……イワという発音に、何か手がかりはないかどうか。とくにイワが何か船にかかわるとすれば、それが第一歩となるはずである。

私は、あるとすれば、黒潮によって移入した南方系の言語であると考えてきた。したがって、できるだけ古代に近い、古い南方系の諸語属^{アマ}を、いちいちあたってみることにしたのである。

私は、……。

はじめのうちは自分の体験に照らして、東南アジアなどの古語を検索していった。しかし、アマやイワの表音で、船や海の意味にかかわる言葉はなかなかみつからない。ところが、マレー・ポリネシアン語族に入ったとたん、何か目からウロコが落ちるかのように、つぎつぎと適合する表記がみつかったのである。

マレー・ポリネシアン語族というのは、南太平洋地域に広く分布する言語である。アウストロネーシア語とも呼ばれ、ニュージーランド語やサモア語、ハワイ語などがふくまれるが、これをひっくるめてポリネシア語と呼んでおこう。地理的には、西はだいたいニューギニア、南はニュージーランド、東はイースター島、北はハワイ諸島という広大な地域である。

現代ハワイ語の辞書のなかに、古代ポリネシア語などの表音が併記されている一冊があった。そのあるページに、めざす言葉があった。イワ 'IWA がみつかったのである。そしてその意味は、軍艦鳥であった。

'IWA=Frigate or man-of-war bird.

イワ=軍艦鳥。これは単なる偶然だろうか。鳥はむかしから、航海に欠かせない動物であった。そのなかでもとくに軍艦鳥は、「航海の案内鳥」として、むかしからポリネシア人によって、南方で利用されていた鳥である。

この鳥は、巣を島の木の上にする性質がある。朝早く島を飛び立って、夕刻に島へ帰り、昼の間は長時間海の上を飛びつづける性質をもっている。このため、朝夕の飛行方向から、島の存在を船乗り知らせてくれるのである。主として熱帯の海に住み、カツオドリなどの海鳥から食物をまきあげる習性がある。黒色、翼が長く、片羽約五十センチ。全体としては日本の鵜によく似ている。

もしイワフネを「軍艦鳥の船」と解するならば、「軍艦鳥によって方向を定める船」の意味になるだろう。『古事記』のイワフネ、『日本書紀』のイワクスブネのイワは、こう考えると、きちんと船に符合する言葉である。

鳥をもちいた航海術は、古代から広く行なわれていた。日本においては、軍艦鳥の役割はカラスなどにかえられた。陸が見えないほど遠い沖に船が出てしまった場合、カラスなどを放してやって、それが飛んで行く方向、すなわち陸地の方向をみつけ出したのだと考えられている。

ここで問題となるのは、イワをハワイ語の 'IWA にそのままおきかえていいのかどうかである。かりにイワを「正確」にローマ字で表にするとすれば IWA となる。この IWA と 'IWA とは、完全に同じ発音ではないのである。

IWA の前に ' がついていても、日本語で書けばイワとしか書けないのだが、専門的にはこのイは声門閉鎖音がともなう「イ」である。これをさらに古代ポリネシア語にまでさかのぼると、KIWA つまりキワという発音になる。だから、イワフネではなくて、キワフネでなければならない、という議論が生ずるのである。

しかしキワがイワに変わったのは何世紀ごろか、また、たとえ「記紀」以前にキワだっ

たとしても、当時の倭人にはイワとしか聞きとれなかったのではないか、などの問題提起をし……。

茂在氏は、問題提起、と控え目な表現をしているが、その推論は、言語面からの研究に突破口を開く画期的なものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な手掛かりなのである。

こうして、天鳥船、天鶴船、天磐船、が、アウトリガー・フロートを持ち、陸地や島の方向を確認するための鳥を舶載する船舶、という意味であることがわかった。

8. 天岩戸

ここで、言語的考察が一部間違っているが、茂在氏が船材について述べた文章をもう一つ見せておきたい⁸⁰¹⁾。

……アマノイワフネとは、ポリネシア語的に解釈すれば、「アウトリガー付きカヌーの鳥船」ということになる。

かんたんに鳥船と書いてしまったが、前にも述べたように、むかしの航海術では鳥を切り離して考えられなかったらしい。福岡県の珍塚古墳の壁画には、船首に鳥がとまっていることや、「記紀」には数多くの「鳥船」の語が出てくるので、おいおい理解されるものと思う。

つぎに『古事記』の「鳥之磐楠船」についてである。『古事記』には、つぎのように出てくる。「鳥之石楠船神、またの名は天鳥船といふ」

天鳥船についてはつづいて述べるが、この「楠船」が問題である。私は現在の段階では、あとであげる各種言語の混交合成の例から、これを日本語の楠で造った船と考えている。ひとつには「楠」の字がそれ自体、「クスの木」という強い意味を指し示すこともあり、楠が船材に適していることもあって、右のように考えるしだいである。

したがってイワを「鳥」とポリネシア語義で解釈すれば、「楠製の鳥船」となる。ただしこのとき、正確にはトリノイワクスブネであるから、「トリの楠製の鳥船」となって、鳥が二重になってしまう。

このようなことは、……。

しかしここで、さらにもう一段深く掘りさげた考察も、できるのではないだろうか。私はトリという表音に注目したのである。

古代ポリネシア語で「トリ (TOLI)」というのは、現代ハワイ語では「コリ (KOLI)」

に変化している。その意味は「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味である。

この解釈でいくと、「トリノイワクスブネ」は「楠の表面をけずって形を整えた船」という翻訳も成り立つ。このかぎりでは少なくとも、「磐の船」とか「石の船」など、水に浮かべる実用船としてありえない解釈よりも、よほど現実性がある。

また、「磐^{いわ}のように堅い楠」などもありえないのである。楠の木には楠の木独特のやわらかさが、最後まで残っている。コクタンやリグナンバイタという木ならばともかく、あくまでも「磐のように堅い」の形容は、楠に関するかぎり不自然と考えるが、読者のご意見はどうであろうか。

こうなると、イワクスブネの別名「アマノトリフネ」は、「きをけずって造ったアウトリガー付きカヌー」となって、これもたいへんスムーズである。とくに無理のない解釈であろう。

茂在氏の言語的考察はどこが間違っているのか、おわかりになったであろうか。

氏が、鳥が二重になってしまう、と考えた個所において、「トリノ」は、「フネ」にかかっているのではなく、「イワ」にかかっている。表記をよく見ればきちんと見て取れることであるが、情報提供者は、明らかに、「トリノフネ」ではなく「トリノイワ」という情報を提供しようとしている。

茂在氏は、toli (koli. vt. To whittle, pare, sharpen, peel; to trim, as a lamp or the raveled edges of a dress; to shave, as hair)⁸⁰²⁾という単語に拘泥するあまり、「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味を提示しつつ、トリノイワクスブネのトリを「楠の表面をけずって形を整えた」と解釈したり、アマノトリフネのトリを「きをけずって造った」と解釈してしまった。

私たちは、既に、天鳥船、天鵠船、天磐船、の三船の意味を解いている。天鳥船の鳥は、文字通り、鳥なのである。

茂在氏が、天鳥船の意味と他船の名称の意味とを整合的に捉えられなかったことは、惜しいことであるが、それ以上に惜まれるのは、「木の表面を薄く削る」程度では、よほど恰好な木材を見つけて来ない限り船は滅多に造れないこと位は承知のはずであるのに、その知識を検証に応用しなかったことである。茂在氏は、天鳥船は木を削って造るが、天鵠船や天磐船は木を削らずに造っている、とか、天鳥船にとって木を削ったことは重要だからわざわざ言及しているが、天鵠船や天磐船にとって木を削ったことは重要ではあるものの一々そのことに言及していないだけである、と考えているのであろうか。

「磐」は、適切な言語の知識がなければ、「磐^{いわ}」と誤解するのは必至であるが、実は、『記』『紀』の一部の単語には、そのような誤解を防ぐ工夫が凝らされているのである。「鳥^{トリ}之^ノ石楠^{イワクスブネ}」

船]、「鳥磬櫂樟船」⁸⁰³という表記は、「石/磬」を石や岩の「石/磬」ではなく鳥の「石/磬」にどうあっても紛れなく理解してもらうために、普通はしない大サービスよろしく、冗長と承知の上で、「鳥之/鳥」という情報を、敢えて冠したものであるが、後人は、書かれたことの意味を取ることもできなかった。

「石/磬」は当面は大丈夫だがそのうちに誤解される日が来よう、と察し、誤解を防ぐ仕掛けを施した表現を練り上げ語部(集団)に語り継がせた者(たち)は、只者ではない。

情報には、一般に、目で受容するもの(以下、視覚情報)と耳で受容するもの(以下、音声情報)の二種がある⁸⁰⁴。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあっては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報(図像や造形など)に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古・鍵遺跡(奈良県磯城郡田原本町)の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。
東殿塚古墳(奈良県天理市)の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、舳先に鳥が描かれている。
珍敷塚古墳(福岡県浮羽郡吉井町)の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部(集団)によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

「天岩戸」は「天+岩+戸」の構造であること、ポリネシア語の「ama-iwa-tau」に相当すること、「天 ama アウトリガー+岩 iwa 鳥+戸 tau 船」の意味構造であること、全称は「鳥を舶載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、姉妹船に「天鳥船、天鶴船、天磬船」があること、などを解明することができた。

9. おわりに

冒頭で(1. はじめに)、私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、天岩戸の意味を正確に取ることができない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識（装備）がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、第三者からは、牽強付会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家ではないのだから、外来語は想定外だった、と恣意的に無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「天岩戸」は「天+岩+戸」の構造であること、ポリネシア語の「ama-iwa-tau」に相当すること、「天 ama アウトリガー+岩 iwa 鳥+戸 tau 船」の意味構造であること、全称は「鳥を舶載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、姉妹船に「天鳥船、天鶴船、天磐船⁹⁰¹⁾」があること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101) 引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。

102) 故於是、天照大御神、見畏、開天石屋戸而、刺許母理^{此三字以音}坐也。爾、高天原皆暗、葦原中国悉闇。因此而常夜往。……於是、天照大御神、以為怪、細開天石屋戸而、……天照大御神、逾思奇而、稍自戸出而、……故、天照大御神出坐之時、高天原及葦原中国、自得照明。(pp. 62-66の原文表記)

201) 『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄1973。p. 289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光1997。p. 304)。

202) 茂在寅男1984。p. 32。

「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203) 筆名。本名、政行。

204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoe と説明しているが、自身の HP (夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>) では、kau = canoe としている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986 には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137) の例があるので、kau を canoe と理解するのに問題は無い。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>。Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC. に掲載されていたが、今は削除されている。

301) 寺川真知夫1980。pp. 141-142。

302) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996。p. 390の原文表記。

寺川真知夫1980。p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。

303) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996。p. 437の原文表記。

なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。

後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはっきりした。趣は、個々人で異なるものであり、趣ではなく、言語に依拠することが望ましい。日本語一視点で解こうとする思考に傾きがちな研究者の意識改革が待たれる。

今後、「手/手乃」の大小を論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。

304) ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。例えば、菊乃/菊野、雪乃/雪野、幸乃/幸野、綾乃/綾野、等の人名は、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないかと、思わせる例である。乃/野を付さない、菊、雪、幸、綾、等との意味の違いを人々が認識しているのか、認識できるのか、を考えるとよい。古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡ではあるが、今日まで受け継がれている例である。

305) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。p. 369の原文表記。

306) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。p. 121の原文表記。

307) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。p. 162の原文表記。

308) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。p. 464の原文表記。

309) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303) で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなく、と感じられることがあるのではないかと。

310) 地名では、例えば、広島県福山市金江町は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江に kau-nui (船-大きい) があることに由来している。金江町金見、金江町藁江、も、金(属)が見えるのではなく大型船 (kau-nui) が見えるのであり、江に乾燥させた稲の茎があるのではなく双胴船 (waa-lua) があるのであろう。

311) 地名には、その痕跡がある。例えば、田浦 (たのうら、長崎県福江市) は、「tau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。

- 401) それぞれ、A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. p. 45 と p. 69。
402) 茂在寅男1981. p. 201。茂在寅男1984. pp. 71-73。
403) 茂在寅男1981. pp. 198-200。
404) 茂在寅男1981. p. 204。茂在寅男1984. pp. 76-77。
405) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 252。
501) 次の例などと比較すれば、情報量の差がはっきりとしよう。
【京阪電車】大阪府・京都府・滋賀県で営業する大手私鉄の一。淀屋橋・三条間の本線などがある。
【青函連絡船】津軽海峡を挟んで、青森と函館とを結び、列車も積載した鉄道連絡船。一九〇八年（明治四一）から国鉄直営、青函トンネル開通により廃止。
502) 和歌山県の堅田漁港も、同様に解釈すればよい。また、人名は、通常、別の漢字で表記されるが、堅田の製造や操船に携わったことに由来していると考えてよいのではないか。
601) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 48。
701) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (p. 135)。
702) 『日本国語大辞典』は、「天鳥船」を「(「天の」は美称) 鳥が飛ぶように速く走る船。あめの鳥船」と説明している (第一巻 p. 543)。
703) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (pp. 117-118)。
704) 『日本国語大辞典』は、「天鴿船」を「天鳩船」と表記し、「(鳩のように速く走る船の意)「熊野の諸手船」の別名とされている船の名」と説明している (第一巻 p. 544)。
705) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (p. 195)。
706) 『日本国語大辞典』は、「天磐船」を「(「磐(いわ)」は「堅固な」の意) ①空中を飛行する堅固な船。「日本書紀」では、高天原から下界に降りる際に用いた船として伝えている。あめのいわふね」と説明している (第一巻 p. 541)。
707) 茂在寅男1981. p. 60-p. 62。
708) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986は、ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float、とする (p. 22)。
709) マルポーロ。「丸」は、音義融合とも言える。なお、小論では、便宜上、天麩羅風に片仮名で読みを振ったが、天婦羅風に平仮名で読みを振っても、構わない。
710) 鴿は、ハトの総称と理解してもよく、「亀鴿」の略称と理解してもよい。
711) 茂在寅男1981. p. 56-p. 59。
801) 茂在寅男1981. pp. 62-64。
802) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 163。
803) それぞれ、『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代上、第五段、一書第二)。
804) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。
901) 天岩戸と天磐船の違いは、例えば、コーヒーミルクとコーヒー牛乳の違いのようなものであり、言葉は違うが意味に違いはない。

〔参考文献〕

〈日文〉

- 荻原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。
角川日本地名大辞典 編纂委員会1990。『角川日本地名大辞典』角川書店。
小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集7）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集8）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。

- 寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2000。『日本国語大辞典』(第二版)小学館。
- 三浦佑之2002。『口語訳 古事記 [完全版]』文藝春秋。
- 茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。
- 茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。
- 山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記 (新編 日本古典文学全集1)』小学館。

〈その他〉

- A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*, Literary Productions Ltd.
- Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

[付記] 本稿は、平成27年度佛教大学特別研究奨励費の助成による研究成果の一部である。

(こうとうじ 中国学科)

2015年11月16日受理